

REPORT
2007
9/27
午後

City Kids Child Care Center

[シティキッズチャイルドケアセンター]



保育

子どもの人権を守り“自己決定力”を育てる

埼玉県 愛泉幼稚園 木村弘美

施設・地域の概要

トロント市内には900カ所の保育施設（公立58カ所、民間・非営利団体運営842カ所）がある。シティーキッズチャイルドケアセンターは、トロント市の託児・保育所のモデル施設として、2003年に建てられた2階建ての施設である。車椅子の子どもでも利用できるように造られており、高い天井や多くの窓からは、広々とした明るい空間を感じることができる。立地状況はダウンタウンに位置し、交通の便もよい。トロント市は所得の格差があり、低所得者が子どもを預けなければならない状況があるというが、比較的この地域は、所得や生活が安定しているとのことである。

保育内容・保育環境

センターの玄関に入ると、一面の掲示物や写真が私たちを迎えてくれた。まず目に飛び込んできたのは保育の理念である。そこには

- ①子どもがよい体験に出会えるような質の高い保育の提供について
 - ②子どもが積極的に参加していけるような高い水準の保育カリキュラムの作成について
 - ③子どもが温かくて安全な環境に直面しながら発達していけるようなプログラムの作成等について
- が書かれており、スタッフはこれらの点をふまえながら、十分に計画されたプログラムと熱心な研究を実践することを義務づけられていることが、利用者に対し宣言されていた。そして、その理念に基づき展開されている保育実践の様子が、写真や資料を通して分かりやすく紹介されていた。どれも、子どもやその家族の生き生きとした表情が映しだされ、それぞれの家族が持つ文化や思想が大切にされている様子が伝わってきた。保育環境においては、遊びの中で、実際家庭で使う食器等を用いることで本物の



保育で用いられる食器類

感覚を体験させることを大切にしており、さまざまな国の生活習慣を思わせるものも数多くあった。多民族国家といわれる中で、個々を尊重する姿がここにもあった。また、部屋の入り口にはジャケットの着方の写真を貼り、模倣をしながら意欲的に活動できるような働きかけをしていた。よいモデルを得ることと達成できたときに承認されるという体験を大切にしているようである。そして、箱庭の活動やアニマルセラピー等を通し、治療的な効果もあげられているようである。全体を通じ、限られた環境の中の工夫がみられた。

定員・待機児童・保育料について

入所希望者は先着順に受け入れており、現在トロント市内では、約7,000人の待機児童がいる。当センターは定員72名。待機児童は153名である。特に1歳6か月までの児の待機児童数は全体の59.5%にあたる。保育料は低所得家庭には扶助があり、場合によっては無料となるとのことである。開園時間は、月曜日から金曜日の午前7:00～午後6:00。土曜日利用希望者には別の機関が紹介される。また、トロント市は4歳になったら公立幼稚園に行くことを奨励しており、公立学校にかかる費用はすべて無料である。教育に対する保障が行き届いている様子が

うかがえた。

所見

担当者の話を聞きながら、明確な理念に基づく教育的観点からの保育内容の実践や、スタッフの確かな知識と技術に裏打ちされた自信が伝わってきた。この施設の有効性は、専門家がいることや、問題のある子どもの適切なケアを関係機関と連携しながら早期対応をすることができる点である。この点は日本と類似している。さらに、現場でどう職員を育てていくかという問いかけに対し「ロールモデル」という答えが返ってきた。つまり、周りの職員が手本となるものを見せることなのである。専門家としての力量を高めることや人間性を磨くこと等、個人が研修テーマを持ちながら自分自身を高めていく豊かな環境作りが成されていることを感じた。また、特に印象深かったことは、障害受容（その子の持っている特徴をどう捉えるか）について考える際に“子どもの人権を守るためには何をしたらよいか”を第

一に考えるということであった。カナダはモザイクの国と言われる通り、多民族の国である。障害をもった人たちだけでなく、文化の違いやシングル親、同性愛者の家族の子どもたち等さまざまな立場がある。保育室には車椅子に座った男性やいろいろな肌の色の人形があり、部屋の中にはさりげなく手話の写真が貼られていた。そういったものを示すことにより、子どもたちは自然にそれを受け入れていくという。その言葉通り、一人ひとりの人権が大切にされていたような気がする。この取り組みは、それぞれの違いや価値観を認め合うという体験を積む中で、自分自身がどう生きていくかを考えることにつながっていくであろう。そして、おそらくそれは“自己決定”をしていく力にもつながっていく。子どもの20年後の姿を考えながら人として大切にされる体験を通し、自分らしく、そしてよりよく生きるための育ての援助が、乳幼児期からなされていることに気づいた。